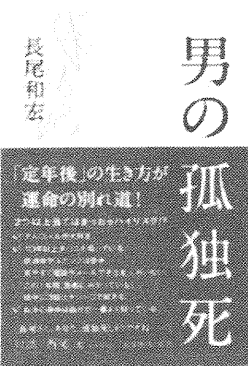


# 男の孤独死

## 男の孤独死



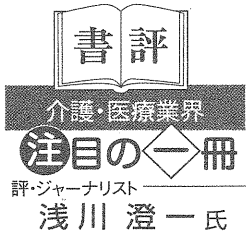
長尾和宏著  
ブックマン社  
税別1300円

長尾和宏

著者は在宅医。兵庫県尼崎市の診療所で外来患者を診察しながら訪問診療に飛び回っている。毎月10人ほどの看取り実績がある。地域に密着した医療活動の実践者だ。高齢者との丁寧な対応が本書から十分窺える。国が力を入れている在

から増えて65〜69歳がピークである。女性は年齢と共に緩やかに増える自然なカーブを描くが、男は不自然だ。

なぜか。男が独居になると、調理などの生活力がないためあつという間に寂しく亡くなってしまふからだろう。本書はこうした「男の危機」にテーマを絞り、一人暮らし男性陣に向けた暮らしの指南書である。



宅医療。自宅で亡くなる人は全国平均で13%だが、実はその中には家族や医師などに看取られない孤独死が4割もある。本当の「看取り」はまだ少ない。孤独死の多くは警察が介入して死因を調べることになる。

そして孤独死のうち7割は男性、しかも50歳代

◆◆◆

男女の心身面での違いを解き明かしながら医師としての注意事項を伝えるだけではない。視点は日常生活全体に及ぶ。数多くの在宅死亡者に接し、その暮らしのしつかり見てきただけに医療の領域を超えたアドバイスが新鮮だ。

「スナックに通え」「習い事をせよ」と社会

# 「ちょっとずつ依存を」と独居男性に指南

交流を勧め、「メールか電話友達を3人持つ」と提唱する。一人で死んでもすぐ発見される手はずを整えておくことを強調する。至言である。孤独死は本人にとっては満足死であることが多いが、周りに迷惑をかけてはならない。

さらに、「ヤクルトレディと仲良しに」との提案は秀逸だろう。もしもの時に、ヤクルトレディから在宅医に連絡してもらおうというアイデアだ。戸別訪問の配達システムを地域の高齢者見守り活動につなげる発想は、自治体の地域包括ケアの現場で起きている。「採算が取れない介護保険の定期巡回随時対応型訪問介護看護よりずっといい」とも指摘する。

つまり「ちょっとずついろんな人やモノに依存しては」と諭す。名言だろう。本書は、あちこちで著名人の名が現れる。「平幹次郎の入浴死は平穩死」「大原麗子は不審死」など芸能人の孤独死事例を解説。綾小路きみまろ、小泉純一郎、砂川啓介などの言葉も引用し、読者の興味をかきたてる。